
異世界の後宮で勝ち組を目指す話

SS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の後宮で勝ち組を目指す話

【Nコード】

N4288Y

【作者名】

SS

【あらすじ】

異世界に転生トリップしたもと38歳OL、現侯爵家3女。ド派手な両親兄妹に比べて地味な容姿の主人公がラッキーにも裕福な貴族の家に生まれたので、現代知識はどうしても我慢できないところを改善する程度におさえ、のんびり趣味に生きる事を目標にがんばる話。

ばちばち更新。異世界転生ものの好きがこうじて自分でも書いてみたくなりました。

超二ト的勝ち組の後宮での顧みられないその他大勢のお妃様を目指す話です。

主人公最強ではありませんが、主人公至上主義ですので、主人公が辛い目にあったりはあんまりしません。ドキドキハラハラバトル成分もあります。後宮とか出てきたりしますが、恋愛色も強くないです。

基本ほのぼのというか淡々と進む話ですので、お暇な時にひまつぶし程度でお読み下さい。

警告タグのR15と残酷描写は一応つけていますが、そこまでのものはない予定です。

序章

前世、私は39歳アラフォーの独身Oだった。

そこそこに忙しくお給料もまあまあな会社の経理課に勤め、軽度のオタクで活字中毒気味、ネット小説を読むのと書くのが一番の趣味。自作小説を素人小説投稿サイトに何作かアップしたりもしていた。その他の趣味はカラオケと旅行と映画鑑賞といういたって一般的なもの。履歴書の趣味欄にはいつもこちらのみを書いていた。乱読気味なのでネット小説以外の本も小説に限らず何でも読むから、読書をつけ加える事もあるが、最近は読書するってだけでオタクっぽいと思われる事もあるのだ。ゲームも少々するが、それも書かない。私はオープンオタクではなく隠れオタクだった。基本的にチキンなのだ。

周りの友達はほとんど結婚し、子供を産み、色々大変な事もあるけど幸せそうだ。

子供は比較的好きな方なのでそれも楽しそうだなと思うけど、昔から恋愛というものにとんと興味がなく、おつきあいというものをしてみたことはあるけれど、ピンとこず、のめりこむこともない私は大体短い期間で自然消滅という形で恋愛を終わらせた。

これは向いてないんだな、と何度目かで確信した。

30歳の頃には自分は多分結婚はしないだろうと漠然と感じ、マンションを買って猫を飼い老後資金をこつこつと貯金する日々。

周囲からは「結婚しないの?」「寂しくない?」などと聞かれるが、遊んでくれる友達も少数だがいないではないし、猫もいるし、一人で楽しめる趣味も持っている。たまに会う妹の子供を可愛がり、おもちゃを貢ぐ。

そういつ至って気楽な生活に満足していた。

途中で事故や病気になるければ仕事を定年まで勤めあげ、その後は自由気ままに暮らし、いよいよ体がきかなくなれば老人ホームに入ろう。

そんな人生計画をたてていた、まあ普通の何の変哲もないそこらによくいるおばさんだったのです。

そしてこれまたさほどめずらしくもない話で、雨の夜、車のスリップ事故に巻き込まれて死亡。

という前世。そう、前世なのです。

あ、死んだ。そう思って激痛のなか意識を失い、次に目が覚めて、あら？助かったの？と思った時には赤ちゃんになっていた。

最初、体が思うように動かず、目もよく見えなかったたので、やべえ事故の後遺症か？治るのか？ずっと不自由なままだったらどうしよう？医療費と生活費と、しばらくは貯金があるけど…あ、事故だから保険おりる？医療費相手持ち？？と心の中で焦っていたら、巨大な人影が私を覗き込んできた。

「@、。 / ; ! % \$? 」

確実に日本語でない良くわからない言語で優しく何事かを話しかけられ、首の後ろとお尻の辺りに腕をまわされ、ひょいと抱き上げられた。

その人の胸に（女性でした）抱かれたままゆるらゆらと揺らされるに至って、巨人に遭遇した驚きで硬直していた私はなんとなく悟り、体の力を抜いた。

これは、あれだ。輪廻転生ってやつだ。相手が巨人なんじゃなくて私が赤ちゃんなんだ。

転生ってホントにあったんだな…。

この理解の早さはオタクならではのたろう。

ネット小説で今流行の転生ものは私も大好物で、自分もいわゆる「異世界転生トリップもの」に着手し20話ほど書き進めていたところだった。

そこそこ見てくれている人も増えてきていて書くのがとっても楽しかった。

そういえばそもそもあの視界の悪い豪雨の中、夜間に外出したのも、市民図書館で借りていたその小説のNAISEI部分用の資料が翌日返却日だったので、コンビニで必要部分をコピーする為だった。

せっかくこれからNAISEIパート突入！って色々勉強したのに、エタっちゃうのかあ…あ…

それにしても別に転生ものの定番の神様とかには会わなかったけど…。てことは特殊能力とかTUEEEはないな。残念！ま、普通の転生はあるかもだけど、神様チート転生はさすがに願望入った創作物だもんね。

でもこんな普通人間の私でも転生しちゃうなんて、案外転生してみんなしてるのかも。そして死んですぐの赤ちゃんな今はいろいろ覚えてるけど段々忘れていくのかも。

ここはどここの国かなあ。言葉は日本語でも英語でも私の知ってるヨーロッパあたりの言語でも中国や韓国のもなさそうだったけど、できれば紛争とかがある地域じゃなくて、貧困地域でもないところがいいなあ…。あんまり苦勞とかはしたくないよ。この人生ものんびりのほほんと生きていきたい…。

などと切実かつのんきなことを考えつつ、赤ちゃんの脳みそで複雑な事を考えたからなのか、推定母親に抱かれて本能的に安心したのか、揺れに負けたのか、だんだんとおりてくる瞼に逆らわず目を閉じた。

第一章 1話目 視界不鮮明（前書き）

お気に入り登録やポイント評価、ありがとうございます。

第一章 1話目 視界不鮮明

セラスティア0歳です。まだはつきり目が見えません。

セラスティアというのは今世での名前です。周囲の人影が私に話しかけていると思われるとき、たいていまず「セラスティア」「ティア」という単語が出てから言葉が続くので、多分私の名前なんだと思います。

「ティア」は愛称？

美しい響きの名前ですが、もと日本人的感觉で言うとか大仰な名前のようにも感じられます。文字数が多いし。

他にも多分「おっぱい」もしくは「ごはん」、「おなかすいた」、「おしめ」、「ねむい」、「いいこ」もしくは「かわいい」だろうと思われる単語を覚えました。これもよく出てくるんですよ。まあ、古今東西赤ちゃんに多く話しかける言葉のパターンは決まっていますからね。その他にも確信はできないけど多分こう言ってるんだろっな〜という単語もあるし、順調に語彙を増やしています。まだまだ発音できませんけどね！

言葉を話そうとすると「あうあう」「あだだ〜」ってなっちゃう。そして微笑ましい感じで見られてる。よく見えてないけどそんな雰囲気がある！

赤ちゃんライフは結構大変です。

何が大変って、すっかりした意識があるのに目ははつきり見えな
いし、体も思うように動かないし、周囲の話していることもほぼ意
味がわからないし、退屈で死ねるレベル。もう寝ることしかできま

せん。

実際起きているときには転生についてだとか、前世の自分の死後のことだとか、現在の周囲についての考察なんかを、赤ちゃんの未熟な脳みそでぐだぐだと考えているからなのか、すぐに眠くなるので、超寝てる。

前世で妹の子供が出来たときに調べたけど、40%の赤ちゃんは18時間から20時間眠るというから、決して寝過ぎって訳じゃないだろうけど。

たまに、赤ちゃんの頃からこんなにたくさん考えてて大丈夫かな？赤ちゃんは脳細胞がまだ発達していないから考えるということが出来ないって聞いたことがあるような気がするんだけど、脳みそぱーんってならない？って少し心配になるけど、今のところ特に頭が痛くなったりはしていないので、大丈夫だと思う。思いたい。

今の状況だとそのつもりがなくてもいろいろ考えちゃう。ていうか、思考を止めるとか難しすぎる。

大きくなったら覚えてないし、研究してもわかんないだけで、実は赤ちゃんてみんな生まれてすぐからいろんなことを考えてるのかもしれないし。

そうそう、尾籠な話で申し訳ないんだけど、よく小説であるような転生者の難関、おしめのお世話。

私の場合も意識は大人なんです、人様に下の世話をしてもらうのはやっぱり抵抗ありました。でもまだ必要箇所の筋肉ができていないのか、我慢するなんて無理でした。まさに垂れ流し！

それで、泣き声あげて人を呼べば換えてもらえるんだけど、最初恥ずかしくて少し泣くのを躊躇してたの。

そしたら布おむつなもんだからだんだんかゆくなってきたやつて。もちろん赤ちゃんなんで手が届かないからかゆくてもかけない！おまけにデリケートな赤ちゃんスキンはすぐかぶれちゃう！そんな

つたら拷問過ぎる！と思っておもいきり泣き声をあげましたよ。

恥ずかしがってもしょうがないよね！だって赤ちゃんなんだもん！みんな一度は通る道さ！

あとは、どうも私が「私」という意識を持つてばつちりと目が覚めたあのときにはすでに生まれてから何ヶ月か（なんとなく2、3カ月位って感じ？）なんでその時点での覚醒だったのかは全くわからない）経ってたっぽいので、それまでに何度となくおしめ換えは行われただろうから、今更恥ずかしがってもね…という。

泣き声をあげるという行為も意識的に良い大人な私にはちよつと難しいかな？と思ったりしたんだけど（だって、悲しくも何ともないのに大声あげて泣いてくださいと言われても、俳優でもない限り難しいよね？だいぶ思い切りがいると思う）これが精神は肉体に引きずられるという事なのか（ちよつと違う？）かなり簡単に泣ける。不快感を感じたりすると気を抜いたらすぐ泣けちゃう。止まらない。あつという間に大音響ですよ。まあ、これが正しい赤ちゃんの姿だよね。

もうひとつの転生者的問題の、おっぱい飲むのが恥ずかしいって感覚はあんまりなかった。これって自分が女だからかな？もし、もと男だったら恥ずかしいし、抵抗あったかもしれない。

飲まなきゃ衰弱しちゃうししょうがない。合い言葉は赤ちゃんなんだもん！でよろしく！

なまぬるいミルクとかちよつと…って思ってたけど、赤ちゃん舌にはとつても美味しかった。おっぱいうまうま。

ただ、少し気になることがあって、どうも私におっぱいをくれる女性が二人居る。

一人は母親っぽいけど、もう一人はどうやら乳母やさんってやつみたいだ。そして、おしめ換えだの行水だのお着替えだののこまごましたお世話をしてくれる人があと2、3人いるっぽい。

使用人がいるの？もしかして今世のおうちってお金持ち？？

それに周囲で動く人影のうち、女性と思われる人たちのシルエツトがもつさりしている。動くときはわさわさ動く。何人かが揃った地味目の色合いのもさもさはメイド服？だと思っただけ、母親らしき人影も姉らしき少し小さめの人影も綺麗な色のもさもさを着ている。どうやらドレスみたいなのを着ていると思われる。

…ドレスって…ドレスを日常的に着る国なんてあったっけ…？？

あとこれは男女関係なく頭のあたりの色がえらくカラフル。髪の毛の毛なの？？

薄い水色とかパステルピンクとかオレンジとかなんですけど…。

染めてる？ウィッグがはやり流行ってるの？まさか地毛じゃないよね？人類に薄い水色の頭髮とかありえないよ…。

なかでも私の家族と思われる人たちの頭の色はかなり派手で、金とか銀とか。金髪や銀髪は人類的にありえないので、それはいいんだけど、なんか発光してるみたいにキラッキラ！金髪や銀髪ってこんなに光り輝くものなのかしら…。

なんか思いつくことがないではないんだけど…まさかね？違うよね？

第一章 1話目 視界不鮮明（後書き）

しばらく乳幼児期が続きます。

後宮が出てくるのはまだまだもつと先です。

タイトルに偽りあり??? 話の進み具合によつては途中でタイトル変更するかもです。

第一章 2話目 未知との遭遇（前書き）

お待たせしました。これからも更新頻度は1週間に1度程度になるかと思われます。

ぼちぼち進めていきます…。

第一章 2話目 未知との遭遇

このたびめでたく2歳になりましたセラスティア・シエリア・デイ・アンフォールです。フルネームで名乗ってみました！長いね！

実は最近わかったんだけど、私の家ってばお貴族様でした。王の子供で、臣下に下った者に与えられる爵位の次の爵位らしい。純粋な貴族としては最高位。これって侯爵って事だよ？立派な上級貴族じゃん！

それまでも、このうちはんばなくお金持ちだなく、てか、うちっというより、これはすでにお屋敷というレベルよね…とは思ってたけど、まさか貴族とは思わなかった。

しかし、残念な事に現代の貴族制度の残っている地球上のどこかの国の貴族って訳じゃないんだよね…。

もしそうなら安心してセレブライフを満喫できるってものだけど、今世で私が生まれたのは前世から見るとまったく異なる世界。いわゆる異世界。

しかも、文明は今のところ観察する限り中世ヨーロッパ程度。

まあ、まだお屋敷の中やお庭を散歩する程度の行動範囲内でしか世界を知らないの、断定はできないけど、字を覚えるために読み聞かせられている本の内容を鑑みても、多分間違っていないと思う。

こちらでは主に使われている紙は羊皮紙っぽいもので、一冊一冊手書きなので、本はとても高価。

子供向けのも本というのも貴族子女に読み聞かせるためのもので、さし絵もほとんど入ってないし、内容は世界の成り立ちの神話とか、昔の英雄の伝説とか、簡単な社会構成の説明（王様がいて、貴族がいて、騎士がいて…みたいな。自分の家が貴族で侯爵だというの

この本を読んでいる時に説明されて知った）などだ。

これらの本は娯楽のためのものではなく、幼子に無理なく世界を教えていくための教科書のようなものだ。それで学んだところによると、少なくとも私の今いる国は中世的な社会制度で、世界は神様が造って、神様の子孫がはじめの王様。王権神授説ですね。わかります。

中世ヨーロッパ風の異世界に転生とは、まさに転生トリップのテンプレ！って感じ。

前世での私の好物ですが、まさか実体験することになるうとは……。

ここまででは、それってただ単に地球の中世ヨーロッパに逆行トリップなんじゃない？と思われそうだけど、ここが異世界だということは、かなり早い段階で判明した。詳しく言うなら目がはつきり見えるようになってすぐ。

何故分かったかというところ、魔法があるんだよね、この世界。

魔法ですよ！魔法！初めて見たときにはかなり興奮しました！

いつもベビーベッドの横で行われる私の沐浴準備中に、私の未知との遭遇たるその魔法は行使されました。

鮮明な視界が嬉しく、いろんなものがめずらしくて、その時もしつくり準備を眺めていたのです。

私の専属メイドであるパステルピンク髪のリリーが絨毯の上に布を何枚か敷き、空の桶を置き、そこにもう一人の専属メイド、薄水色髪のマルタが手をかざしてもによもに何事かつぶやくとパシャンという音と共にいきなり桶に水が。

え??と思つて見ていると今度はリリーが水の溜まった桶に手が
かざし、同じように何かつぶやくと桶から湯気が!

あつという間に沐浴にピッタリな温度のぬるま湯が桶の中にでき
あがつたのです!

なんとということでしょう!まさか私のすぐ横で日々普通に魔法が
使われていたなんて!

桶に何かをそそぐ音なんかが聞こえなかったから、てっきりいつ
もその場で準備してるんじゃないかと、適温にしたお湯をはった桶を
えつちらおつちら娘さんが細腕で持つてきてるんだと思つてた!重
労働で大変ですね、毎日すみませんって思つてたよ!いや、つねづ
ね丁寧にお世話してもらつてありがたいのにはかわりなかったけど!

今でも私の専属をしてくれているふたりは、何故か大興奮して目
をキラキラさせている私に首をかしげながら沐浴させてくれた。

それから魔法らしき現象を見るたびご機嫌な様子に、どうやら
魔法を見るのが好きらしいというのがわかったみたいで、あやすと
きに水の玉を空中にぶかぶか作つたりなどしてくれるようになった
んだよね。

それに、まだ視界がぼんやりしていた頃にもうすうす感じていた
けど、この世界の人間の頭髮はとっても色とりどりで、もとの世界
の人類では自然発色しないような色をしている。あと、髪の色がや
つぱりパツと目立つけど、目の色もおかしい。金色とかあるんだよ!

魔法を実際に自分の目で見て、ここが異世界であると確信した訳
だけど、それまでも周囲の人間の色彩からそうじゃないかと思つ
てはいたんだよね。魔法はだめ押しって感じかな。

この世界では魔法の属性が髪と目の色に顕われる。薄水色のマル
タは水属性、パステルピンクのリリーは火属性だ。ファンタジーっ
ぽいね!

まだ属性と髪の色に関連性を把握してなかった赤ちゃんの頃には、カラフルな髪の色がすごく不思議で、甘えるふりでメイドさんの髪の色をひっぱってみたい、その際抜けた2、3本の髪を観察してみたり（とても痛がっていました…被害にあった皆様、あのころはごめんなさい…）だっこのときにじっくり根本まで観察してみたりしたなあ。今はもうそんなもんだと納得したけど、染めたってこんな綺麗な色にはならないと思えるパステルピンクや薄水色の髪の色が、どう見ても頭皮からじかに生えていても興味深かった。自分の髪の色を観察したらいいじゃん、と思われるでしょうが、あいにくと私はどうやら地属性。髪も目も普通に茶色という前世でも良くある普通の色合いなので、観察したってちっとも面白くないのです。つまらん。地属性に不満はないけど、私ももっと面白い色が良かったなあ…。

しかし、異世界で中世なんて、フィクションとして読む分にはいいけど、実際そこで生きていくとなると不安になるよね。

今のところ読んでもらった本には出ていなかったけど、定番のエルフやドワーフなんて人間以外の種族もいるんだろうか？こないだ読んでもらった「はじまりのおはなし」という神話の本によると、神様や精霊はいるって事になってる。ドラゴンやペガサスみたいな幻獣系は出てなかったけど、魔物という生き物はいるらしい。人間に敵対的な魔族や魔王なんてのもいるのかな？いたら嫌だなあ。

魔族や魔王がいなくても、人間同士が戦争中の群雄割拠の時代もすごく嫌だなあ…。戦争なんかおきて負けたら、一族郎党死刑とか簡単になりそう。中世の戦争はそのへんがすごくシビアだったはず。戦争じゃなくても貴族同士の権力争いや、陰謀に巻き込まれて陥れられたりなど、中世貴族生活の災難っていくらでも思い浮かぶわ。庶民生活も大変そうだけど！基本的人権はまだなさそうだし。

私の周囲の雰囲気はのほほんとしてるけど、いかんせんお屋敷が

ら出たことがないので何とも言えない…。

それに、安全面もちろん心配だけど、一番の不安はこの世界にはテレビもネットももちろんなく、本が高価ということから、漫画やバラエティ豊かでストーリー性溢れる小説なんてものも期待薄だということ。活字中毒だった私には生き辛い世界すぎる。

今はまだ見るもの聞くもの珍しくて、日々楽しく暮らせてるけど…。

もうちょっと大きくなってから、もうちょっとこの世界を把握してから話だけど、この点だけはどうにかしなければ…。

第一章 2話目 未知との遭遇（後書き）

全く会話なし…。

暫く主人公が世界に関してぐだぐだ考察したりします。無駄な心配
なんかもしています。

次話では主人公のキラキラ家族が出てくる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288y/>

異世界の後宮で勝ち組を目指す話

2011年11月21日15時09分発行